

猿のブライアの船旅 - 3度目の報告事例

こちらは、英文記事「[Brian's wild ride – just another case for a Gard claims executive](#)」（2020年7月1日付）の和訳です。

5月中旬、Gardのあるメンバーの船がマレーシアのケラン港から中国の廈門に向かっていたところ、積み上がったコンテナの上を動き回っている猿を乗組員が発見しました。

その猿の目撃情報は Gard に即座に報告されました。霊長類はコロナウイルスに感染しやすいため、廈門の Gard コレスポン



デントは COVID-19 の感染が発生しないように、猿を捕獲・隔離する必要があると助言しました。当初は、廈門のサファリパークの職員に乗船してもらい、猿を捕獲する計画でした。サファリパークの職員は侵入した猿の写真を確認し、その猿が中国で保護されている「ラングール」の一種であることを事前に突き止めていました。

税関から哺乳類を中国に輸入することは違法である旨の説明があり、猿の捕獲もままならないことから、次の手段として、ケージを本船に持ち込んで、次の寄港地である青島に到着するまでにスライスしたリンゴで猿をケージに誘い込んで捕獲する作戦を計画しました。

動きが素早い猿は捕獲が難しく、地元税関当局と協議を重ねた末、船舶の代理店が何とか青島当局を説得し、日中の停泊許可を得て、猿をケージに誘い込む作戦を続行しました。代理店が青島動物園に連絡を取り協力を要請したものの、COVID-19 に対する不安から動物園の職員が乗船しての対応は実現しませんでした。この頃には、乗組員達は紛れ込んだ猿を「ブライア」と呼ぶようになっていました。同船は、青島での捕獲作戦を終え、次の寄港地である韓国の釜山に向かいました。

釜山では、コレスポンデントが消防救急隊にブライアの捕獲支援を依頼し、獣医師にも連絡を取っていましたが、ここでも COVID-19 に対する不安が、救急隊や獣医師による乗船対応が出来ないこととなりました。いずれにせよ、韓国当局は既にブライアを韓国では下船させられないと決定していたため、ブライアは本船と共に次の寄港地である上海に向かいました。上海に向かう途中、ブライアは船の中を走り回ることよりも、リンゴにいつでもありつけることを選び、ようやくケージに入りました。その後のブライアの世話は乗組員が行うこととなりました。



上海のコレスポンデントは、上海にある野生動物園と野生動物保護管理ステーションに連絡を取っており、ブライアンを新たな家に受け入れる準備は万全であるかのように見えました。しかし、税関がブライアンの乗船地であるマレーシアにはデング熱が風土病として存在するとして、ブライアンを船から降ろすことを拒否したのです。可哀想なブライアンはケージに入れられたまま船に留まらなければなりません。次の寄港予定地は寧波でした。

寧波を出港後、船長は残された手段はブライアンをケラン港に連れ帰ることだけだと判断しました。そして、本船はシンガポールの寄港予定地に向かう航路を変更して、ブライアンの最初の乗船地であるケラン港に向かいました。ブライアンは1か月以上、南シナ海の海域を行き来したことになります。私が猿に関する報告を受けたのは今回が3度目です。こうした訪問者への対応は常に困難を伴いますが、パンデミック中は一層難しさが増します。

本情報は一般的な情報提供のみを目的としています。発行時において提供する情報の正確性および品質の保証には細心の注意を払っていますが、Gard は本情報に依拠することによって生じるいかなる種類の損失または損害に対して一切の責任を負いません。

本情報は日本のメンバー、クライアントおよびその他の利害関係者に対するサービスの一環として、ガードジャパン株式会社により英文から和文に翻訳されております。翻訳の正確性については十分な注意をしておりますが、翻訳された和文は参考上のものであり、すべての点において原文である英文の完全な翻訳であることを証するものではありません。したがって、ガードジャパン株式会社は、原文との内容の不一致については、一切責任を負いません。翻訳文についてご不明な点などありましたらガードジャパン株式会社までご連絡ください。